

動詞の意味特徴からみる「ている」の 「結果の状態」用法の習得

— 縦断的事例研究

簡 卉雯

◆要旨

本稿は中国語母語話者による縦断的な作文データを用い、「結果の状態」用法の「ている」の習得過程に焦点を置き、結びつく変化動詞の種類（状態変化動詞／位置変化動詞）から学習者の中間言語とその変化を分析した。分析の結果、変化動詞の種類の違いが「結果の状態」用法の「ている」の習得に影響を及ぼすことが判明した。また、学習者の中間言語における過剰使用のパターンである「テクル→誤用のテイル」は主に位置変化動詞とともに現れ、非使用のパターン「誤用のタ」は主に状態変化動詞とともに出現することが観察された。これらは結びつく変化動詞の意味特徴に起因する可能性がある。

◆キーワード

ている、結果状態、位置変化、状態変化、
中間言語

◆ABSTRACT

This study examines the acquisition processes of the resultative state meaning of Japanese aspect marker *-te i-(ru)* from the viewpoint of the semantic features of achievement verbs (change-of-state verbs/change-of-position verbs), by analyzing native Mandarin (Chinese) speakers' writing. The results show that the development of the meaning of the resultative state *-te i-(ru)* is strongly influenced by the semantic features of achievement verbs. It also found out that native Mandarin speakers tend to use *-te i-(ru)* as an alternative to *-te kuru* when associated with change-of-position verbs, and used the past marker *-ta* as an alternative to *-te i-(ru)* when associated with change-of-state verbs.

◆KEY WORDS

-te i-(ru), Resultative State Meaning, change-of-position, change-of-state, interlanguage

The Acquisition of the Resultative State
Meaning of Japanese Aspect Marker *-te i-(ru)*
from the Viewpoint of the Semantic
Features of Verbs
A longitudinal case study
CHIEN HUI-WEN

1 はじめに

日本語アスペクト形式の1つである「ている」の「結果の状態」の用法は、「動作の持続」の用法に比べ、どの言語を母語とする学習者にとっても習得が困難であることが報告されている(小山2004, 菅谷2004)。習得が困難になる要因と学習者の言語体系である中間言語に関して、先行研究は動詞の語彙的アスペクト、文法的アスペクト、母語からの影響、教科書での導入順序、文末と連体修飾節の統語環境など、さまざまな側面から研究が行われているが、まだ明らかにされていない点も多い(黒野1995, Shirai 2002, 小山2004, 菅谷2004, 許2005, 塩川2007)。本稿は中国語を母語とする学習者の縦断的な作文データを用い、「結果の状態」用法の「ている」が付く変化動詞^[註1]の意味特徴(状態変化動詞/位置変化動詞)から、「結果の状態」用法の習得過程及び学習者の中間言語とその変化を分析し、習得困難になる要因を調べることを試みる。動詞の意味特徴の分類では、状態変化動詞は主体・客体の内的属性の変化を表す動詞とし、位置変化動詞は主体・客体の物理的な位置の変化(即ち移動)を表す動詞とする(影山1996, 2001; 川野2003)。

2 先行研究

日本語アスペクト形式「ている」は(1)に示した4つの用法に分けられる(白井2004)。

- (1) a. 動作の持続: 健が走っている。
- b. 結果の状態: 窓が開いている。
- c. パーフェクト: 健は本を3冊書いている。
- d. 習慣: 健は最近車で学校に行っている。

この4つの用法の中で、「動作の持続」と「結果の状態」は「ている」の中心的用法とされていて、日本語学と習得研究において活発に議論されている。

第2言語習得研究における「結果の状態」用法の習得について、先行研究では、文法テスト(許2005, 小山2004)、インタビュー(許2005)、作文データ(簡・中村2010)などの調査が行われているが、概ね「動作の持続」の用法より「結果の状態」用法のほうが習得しにくいことが報告されている。

そして、「結果の状態」用法の習得過程に関しては、その前段階として、「ている」の代わりに「た」を使う時期があると指摘されている(黒野1995, 小山2004, 許2005, 塩川2007)。その理由の1つとして、動詞の意味成分は動詞形態素の習得順序に影響するために、過去形態素は到達動詞から習得が進み、進行形態素は活動動詞から進むからであると報告されている(Andersen & Shirai 1994)。また、許(2005)は母語による影響の側面から考察を行った。その結果、中国語のアスペクト助詞「着」と対応する動詞(例: 座っている、咲いている)の正用率が80%~100%と非常に高かったのに対して、中国語の完了を表す助詞「了」と対応する動詞(例: 死んでいる、落ちている)の正用率は60%以下であり、「た」の誤用が多かったと報告していて、アスペクトの習得に母語からの負の転移の影響があったと指摘している。

「結果の状態」用法の「ている」と結びつく変化動詞には、「死ぬ」、「割れる」のような状態変化動詞と「来る」、「入る」のような位置変化動詞とがある(工藤1995, 2002; 鷺尾・三原1997)。状態変化動詞はサマの変化、即ち、対象の内的属性の変化を表すのに対して、位置変化動詞は主体・客体の存在位置の変化を表す(影山1996, 2001; 川野2003)。状態変化動詞は「ている」と結びつき、動作・作用が瞬間的に終わり、主体・客体に生じた変化の結果としての「状態」が残ることを表している。例えば、「花瓶が割れている」の「割れている」は花瓶の内的属性に状態の変化が生じ、その変化の結果が残ることを表す。一方、位置変化動詞は「ている」と結びつき、動作・作用が完了した時に、主体・客体の空間的な移動に伴う「位置」変化の結果を表す。例えば、「田中君が今、研究室に来ている」の「来ている」は「状態変化」を表すのではなく、主語がある場所から研究室に移動することを示す(鷺尾・三原1997)。従って、位置変化構文には着点への移動・存在を標示するニ格と、出発点を標示するカラ格が現れる。よって、「状態変化動詞+ている」と「位置変化動詞+ている」の両者もある時間軸の中で、ある現象が発生し、その変化の結果が残ることを表す。し

かしながら、「状態変化動詞＋ている」は対象の内的属性の変化を表すが、「位置変化動詞＋ている」は対象の物理的な位置変化を表す。

陳 (2009) は中国語話者を対象とし、「移動」を表す動詞の「結果の状態」の「ている」と「ある／いる」の使用を考察した。その結果、中国語話者は「お客さんが来ている」、「財布が落ちている」などの代わりに「お客さんがいる」、「財布がある」を使用する傾向があることが明らかになった (陳2009, 庵2010)。

このように、「ている」の「結果の状態」の用法の習得過程及び学習者の中間言語が変化動詞の意味特徴の違いによりどう変わるかは検討の余地がある。動詞の意味特徴と「結果の状態」用法の習得の関連性を探ることで、より包括的に「ている」の習得過程を明らかにすることが可能になるとと思われる。

また、「ている」の習得に関するこれまでの研究は横断的な発話データと文法テストに基づいたものが中心であり、縦断的な書き言葉のデータによるものはまだ少ない。学習者の言語体系である中間言語がどのような過程を経て形成されるかを解明するためには、縦断的調査が不可欠である。

以上を踏まえ、本稿では中国語母語話者を対象に、簡・中村 (2010) で扱われた「LARP at SCU」の縦断的な作文データを再分析し、「ている」の「結果の状態」の用法に焦点を当て、「学習者の習得過程及び中間言語の形成過程は変化動詞の意味特徴の違い (状態変化/位置変化) によりどう変わるか」を研究課題として検討を行った。

また、状態変化動詞と位置変化動詞に関して、本稿では影山 (1996, 2001)、工藤 (1995) と川野 (2003) の分類と定義に基づき、主体/客体及び意志/無意志は区別せず、状態変化動詞は主体・客体の内的属性の変化を表す動詞とし、位置変化動詞は主体・客体の物理的な存在位置の変化 (即ち移動) を表す動詞と定義した。そして、位置変化動詞であるかどうかについて、着点への移動・存在を標示するニ格と、出発点を表示するカラ格がその変化構文に現れるか、または、許容するかを1つの判断基準とする。具体的には、状態変化動詞として「なる、溶ける、似る、結婚する、切れる、慣れる」など、位置変化動詞として「入る、(～から～に) 浮かぶ、(～が～から) 剥がれる、(～が～に) 付く、(～が～に) 止まる」などの動詞が挙げられる。

3 調査

本調査に使用したデータは、台湾の東呉大学が日本語科に通っていた中国語を母語とする学部生を対象に作った「LARP at SCU」という日本語学習者のコーパスである。それは、2003年9月入学者が1年生後期から4年後期まで月に1回行われているもので、同じ被験者による初級段階から3.5年間の延べ33回の作文 (作文執筆中は辞書使用不可) 及びインタビューデータ (20分前後) である。本稿では書き言葉を検討するため、作文データのみを分析対象として使用した。

調査対象については、「結果の状態」用法の「ている」の使用状況と変化が数多く観察できるように、最終段階まで参加し続けた学習者16名のうち、プロジェクトの開始当初よりも最終段階に進むにつれて作文の文字数が増えている学習者の6名を対象とした。分析対象とした作文データはこの6名の学習者により、約半年ごとに書かれた7回の作文である。作文は調査期ごとに、被験者間で統一したテーマを与えられて書かれた600字程度のものである。調査時期、学習歴と作文のテーマは表1の通りである。

表1 調査時期、学習歴と作文のテーマ

	調査時期	学習歴	作文テーマ
①	2004年5月	9ヵ月	「私の部屋」
②	2004年11月	1年3ヵ月	「十年後の私」
③	2005年6月	1年10ヵ月	「流行」
④	2006年1月	2年5ヵ月	「2006年を迎えて」
⑤	2006年6月	2年10ヵ月	「私の愛読書」
⑥	2006年12月	3年4ヵ月	「台湾のコーヒー文化」
⑦	2007年4月	3年8ヵ月	「恋愛」

以下の手順で分析を行った。1) 学習者の作文データから「ている」が使用された箇所、及び使用が義務的な箇所を日本語母語話者2人に頼んで抽出した。2) 学習者の作文データから「結果の状態」用法の「変化動詞＋ている」を抽出した。3) 抽出した「ている」を①正用②過剰使用③非使用 (「ている」を

使用すべき箇所を用いなかったもの)に3分類した(表2)。4) 正用と誤用のパターンの変化を見るために、それぞれの調査時期に現れた正用、過剰使用と非使用の産出回数(延べ数)を計算した。5) 作文テーマの違いによる影響がないように、学習者6名の習得過程に共通した一般性とそれぞれの個別性を分析した。

4 結果と考察

調査結果から「結果の状態」用法の「ている」の正用と誤用のパターン、用法、定義、及び使用例を簡・中村(2010)に基づき、表2のようにまとめた。なお、便宜上、以下では「ている」の正用と誤用のパターンを表2に示したように称する。以下では表2に基づき、状態変化動詞と位置変化動詞から正用、過剰使用及び非使用の変化を調査時期ごとに観察し、被験者の使用例を引用しながら考察していく。

表2 「結果の状態」用法の「ている」の正用と誤用のパターン、用法及び定義

	呼称	定義と学習者の使用例
誤用	過剰使用	テクル→ 誤用のテイル 「てくる」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用 例：すぐ懐かしい感じが心に* <u>浮かんで</u> いました(浮かんできた)。(学習者A、③期)
	ル→ 誤用のテイル	「る」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用 例：自分の店を* <u>持</u> っていて(持つこと)、これは私の夢です。(学習者D、①期)
	その他→ 誤用テイル	「てくる」と「る」以外の形式を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用または、動詞の異なりである。それぞれの使用頻度が1回のみであることで、「その他→誤用のテイル」という項目に入れた 例：テレビや雑誌などはよく今は何を* <u>盛</u> んでいる(何が盛んなのか)が書いています。(学習者B、③期)
非使用	誤用のタ	「ている」を使用すべき箇所に、「た」を使用した誤用 例：今台湾の人々はコーヒーの味に* <u>慣</u> れた(慣れている)。(学習者F、⑥期)
	誤用のル	「ている」を使用すべき箇所に、「る」を使用した誤用 例：私は今バスケットボールチームに* <u>入</u> る(入っている)ので、部屋の中にバスケットボールもあります。(学習者B、①期)
	その他の誤用	「ている」を使用すべき箇所に、「た」と「る」以外の形式を使用した誤用、または、動詞の異なりである。それぞれの使用頻度が1回のみであることで、「その他の誤用」という項目に入れた 例：「古い猫」の内容はある猫の体にはETが* <u>つ</u> いて ^[註2] (ついていて)、3千年以上の生活を過ごしてきた。(学習者F、⑤期)

※ *は学習者の誤用で、()は筆者が訂正したものである。

学習者による「結果の状態」用法の「ている」の使用は合計71例で、全体的な使用傾向を正用、過剰使用と非使用別に、状態/位置変化動詞ごとにまとめると表3の通りである。表3から、過剰使用は位置変化動詞に集中しており、非使用は状態変化動詞に集中していることが明らかになった。誤用の形(過剰使用/非使用)は結びつく変化動詞の種類に左右されることが示唆された。

表3 「結果の状態」用法の「ている」の全体的な使用傾向

	正用	過剰使用	非使用	計
状態変化動詞	19	3	14	36
位置変化動詞	21	10	4	35
計	40	13	18	71

4.1 正用の使用状況

表4は「結果の状態」用法の「ている」の正用の使用状況を動詞種類別(状態変化動詞か位置変化動詞か)に縦断的に示したものである。

表4 正用の産出回数と変化

調査時期	学習者A		学習者B		学習者C		学習者D		学習者E		学習者F	
	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置
①	●	●					●			●●●		
②		●								●		
③	●	●	●●							●		
④		●	●							●		
⑤	●●●	●●●	●		●	●			●	●		●
⑥		●		●	●			●	●	●		
⑦			●				●		●	●	●●	

表4から正用の産出回数と変化に関して次の傾向が観察された。まず、学習者AとEにおいては、学習初期①期から学習後期の⑤と⑥期にかけて、(2)と

(3) のような位置変化動詞による正用が見られた。状態変化動詞による正用の産出は、学習歴が長くなるにつれ多くなり、特に⑤期において学習者Aは使用数の急上昇、学習者Eは使用の開始が観察された。

それに対して、学習者B、C、DとFにおいては、位置変化動詞による正用の産出は学習初期の①と②期には全く見られず、調査期間を通してもわずかであり、それぞれ1回のみであった。一方、状態変化動詞による正用の産出数は日本語レベルの上昇に従い、位置変化動詞より多くなることが見られた。その中で特に学習者Bにおいて、⑥期を除き、③期から調査後期の⑦期までは(4)のような状態変化動詞による正用の産出が多くなることが観察された。

- (2) 私の人生電車は、今はどんな駅に止まっているかと聞かれたら、「幸福駅」という答えを持っている。(学習者A、④期)
- (3) コーヒー自体は一番大切なことではないようになり、みんなが気に入ったのは本当はコーヒーという商品についていて「高尚の雰囲気」である。(学習者E、⑥期)
- (4) 今の若者は流行を得ることに夢中になっています。(学習者B、③期)

以上の結果から、特に注目されるのは、調査期間を通して、位置変化動詞の正用産出数が多い学習者(学習者AとE)には、状態変化動詞による正用の産出数も多い傾向があった。一方、状態変化動詞の正用産出数が2回以下の学習者(学習者C、DとF)には、位置変化動詞による正用の産出数も少ない傾向があった。この傾向は、「位置変化動詞+ている」の習得は「状態変化動詞+ている」より困難である可能性が示唆された。

4.2 過剰使用のパターンの使用状況

表5は過剰使用のパターン(「テクル→誤用のテイル」、「ル→誤用のテイル」、「その他→誤用のテイル」)の出現を学習者ごとに調査時期別に示したものである。

表5 過剰使用のパターンの産出回数と変化(「ク」は「テクル→誤用のテイル」、「ル」は「ル→誤用のテイル」、「他」は「その他→誤用のテイル」を表す)

調査時期	学習者A		学習者B		学習者C		学習者D		学習者E		学習者F	
	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置
①								ル				
②						ク						
③	ル	ク他	他									
④		他										
⑤		クク										
⑥				クク			ル					
⑦												

表5から以下のことが明らかになった。まず、調査期間3.5年間において、状態変化動詞と位置変化動詞による過剰使用のない学習者が2人(学習者EとF)いた。次に、(5)のような「ル→誤用のテイル」は状態変化動詞と位置変化動詞の両方に出現していることが観察された(学習者A③期の状態変化動詞;学習者D①期の位置変化動詞と、⑥期の状態変化動詞)。

そして、(6)–(8)のような「テクル→誤用のテイル」は②期から⑥期まで観察され、その中で特に注目されるのは、全ての「テクル→誤用のテイル」が位置変化動詞のみと共に起していることである(学習者A③⑤期,学習者B⑥期,学習者C②期)。

- (5) 自分の店を*持っていて(持つこと)、これは私の夢です。(学習者D、①期)
- (6) 29歳の私は高層ビルの窓から外を見て、そんな感想が*出ていました(出てきました)。そして、温かい紅茶を持って、自分の事務室へ帰りました。(学習者C、②期)
- (7) Aさんは中学校時代のよい仲間です。長い間連絡していませんでしたが、親切な笑顔が昔のままの彼女に話しかけてから、すぐ懐かしい感じが心に*浮かんでいました(浮かんできました)。(学習者A、③期)

(8) コーヒーは元々外国の文化だ。世界大戦の頃に欧米文化とともに、中国に入った。そして、台湾にもコーヒー文化が*入っていた(入ってきた)。その時から、いままで、コーヒー文化はだんだん進歩している。
(学習者B、⑥期)

「テクル→誤用のテイル」のような誤用はどこから来たのか、1つの可能性としては、「てくる」の機能が十分習得されていないことが挙げられる。「てくる」は事態を幅がある現象と見て、その現象の位置または時間の変化の一局面を表すものである。事態を幅がある現象と見る点では、「てくる」と「ている」は共通している。「てくる」の用法が十分習得されていないため、(6) - (8)のような不自然な文が産出される可能性がある。この推測を明らかにするには、「てくる」の使用例も調査対象に加えて、更により多くの学習者で検証していく必要がある。

また、位置変化動詞と状態変化動詞とは同じく変化動詞であるが、「テクル→誤用のテイル」が常に位置変化動詞と共に起すのはなぜであろうか。この現象については、位置変化動詞の性質は状態変化動詞と異なっていることに起因する可能性がある。上述(第2節)したように、位置変化動詞と状態変化動詞の両者は時間的な性質を持つアスペクト形式である「ている」と結びつき、ある時間軸の中で、ある現象が発生し、その変化の結果が残ることを表す。しかしながら、「位置変化動詞+ている」は物理的な位置変化を表すことで、時間的な性質のほか、空間的な性質も併せ持つ。一方、「状態変化動詞+ている」はそのような空間的な性質は見られない。「てくる」は位置変化動詞と同じく空間的な移動を表す働きを持つため、「位置変化動詞+てくる」の形で用いられやすい。しかしながら、「てくる」の機能が十分習得されていないことで、「てくる」と同じく、事態を幅がある現象として捉える「ている」が代わりに使用された可能性がある。

以上から、過剰使用のパターンの出現に対する変化動詞の種類による影響があり、変化動詞の意味特徴と「てくる」の機能が十分習得されていないことに起因して、「テクル→誤用のテイル」は常に位置変化動詞とともに現れると考えられる。

4.3 非使用のパターンの使用状況

表6は3つの非使用のパターン(「誤用のタ」、「誤用のル」と「その他の誤用」)の使用状況を縦断的に学習者別にまとめたものである。

表6 非使用のパターンの産出回数と変化(「タ」は「誤用のタ」、「ル」は「誤用のル」、「他」は「その他の誤用」を表す。)

調査時期	学習者A		学習者B		学習者C		学習者D		学習者E		学習者F	
	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置	状態	位置
①				ルル		他						
②									ル		他	
③			他		他							
④												
⑤	タル										ル	他
⑥	ル他		ル						タ		タル	
⑦			タ									

まず、「誤用のル」の使用に関しては、調査期間3年半にわたって1回も使用しなかった学習者が2名いた(学習者CとD)ことと、状態変化動詞による誤用が多いことが観察された(学習者A,B,E,F)。特に(9)に示したような「誤用のル」が状態変化動詞のみに現れる学習者は4人のうち3人(学習者A,E,F)であることが観察された。

(9) 私は今バスケットボールチームに*入ります(入っています)から、部屋の中にバスケットボールもあります。(学習者B、①期)

次に、「誤用のタ」の使用に関しては、調査期間3.5年間において、使用のない学習者CとDを除く残り4人の学習者では学習中期の⑤期から現れており、そして、状態変化動詞のみに出現していることが観察された(学習者A⑤期,学習者B⑦期,学習者E⑥期,学習者F⑥期)。

非使用のパターン「誤用のタ」は主に状態変化動詞とともに出現することに

関して、状態変化動詞と「誤用のタ」の関連を考察する。上述した(第2節)ように、変化動詞(Shirai 2002と小山2004では「到達動詞」と呼んでいる)の意味成分に起因して、「結果の状態」の「ている」を学習する際、「ている」の代わりに「誤用のタ」を使用する時期がある(Shirai 2002, 小山2004)。更に中国語の完了助詞「了」と対応する動詞(例: 死んでいる)の正用率が低く、「誤用のタ」が多く用いられ、アスペクトの習得に母語からの負の転移の影響があったと報告されている(小山2004, 許2005)。今回データから抽出した、学習者による「誤用のタ」の産出文をその中国語訳(中国語訳は考察のため筆者が訳したものであり、中国語母語話者3人の同意を得ている)と対応すると、表7の通りである。表7から「誤用のタ」に中国語の「了」と対応する文は4文のうち2文を占めていることが分かった。この結果は、先行研究の報告に沿ったものであり、中国語の「了」は「結果の状態」用法の「ている」の習得に影響があることを示唆している。

以上から、状態変化動詞による非使用のパターンへの影響があることが示唆された。

表7 「誤用のタ」の使用文と中国語訳

	学習者による「誤用のタ」の文	中国語訳
1	コーヒーは元々欧米から輸入された。今、台湾の人々はコーヒーの味に*慣れた(慣れている)。(学習者F、⑥期)	咖啡原本是從歐美輸入進來的。現在台灣人已經習慣了咖啡的味道。
2	前に本で読んだストーリーのような恋をしたい。しかし、本当の恋愛は物語とは違う。人によって違う。現在の大学生はそんなことはだいたい*分かった(分かっている)。(学習者B、⑦期)	以前想談像小說中那樣的戀愛。但是、真正的戀愛與小說不同。因人而異。現在的大學生大致都已經知道這個道理。
3	昔は、言論・デモ・集会活動の自由が*限られました(限られていた)。いわゆる「白いテロ政治時代」があります。(学習者A、⑤期)	以前言論、遊行、集會活動的自由受到限制。有所謂的「白色恐怖時期」。
4	コーヒー自体は一番大切なことではないようになり、みんなが*気に入った(気に入っている)のは本当はコーヒーという商品についての「高尚の雰囲気」である。(学習者E、⑥期)	咖啡本身似乎變得不再是那麼重要、大家真正在意的是咖啡這商品所具有的高尚氣氛。

※表中表示：網掛け表示した文字は「誤用のタ」とその対応する中国語訳。囲み線をつけた文字「了」は中国語の「完了」助詞。

以上のことから、「結果の状態」用法の「ている」の習得過程において、状態変化動詞を使用する際には、状態変化動詞の意味特徴と中国語の完了助詞「了」に影響され、「誤用のタ」を産出、位置変化動詞を使用する際には、位置変化動詞の語彙的な意味に影響され、「てくる」の機能を十分習得していない中で、「テクル→誤用のテイル」を産出する可能性がある。よって、学習者の中間言語は変化動詞の種類の違いに影響を受けていると考えられる。

5 結論

本稿は「ている」の「結果の状態」用法の習得に注目し、中国語母語話者による縦断的な作文データを用い、結びつく変化動詞の種類(状態変化動詞/位置変化動詞)から学習者の中間言語とその変化を分析した。分析の結果から、次のことが明らかになった。

まず、「位置変化動詞+ている」は「状態変化動詞+ている」より習得しにくい可能性がある。

次に、学習者の中間言語は変化動詞の意味特徴の違いに影響を受けると考えられる。過剰使用パターン「ル→誤用のテイル」と非使用のパターン「誤用のル」は状態変化動詞と位置変化動詞の両方に観察された。しかしながら、過剰使用のパターン「テクル→誤用のテイル」は主に位置変化動詞と、非使用のパターン「誤用のタ」は主に状態変化動詞とともに出現することが明らかになった。これは結びつく動詞の意味特徴の違いに起因する可能性がある。

しかしながら、今回は6名の学習者を対象とした縦断的なケーススタディであるため、調査で用いられた学習者のデータは限られている。今後はより多くの学習者を対象に、絵の描写タスクや文法テストなどいくつか異なるタスクと調査方法を併用して、同様な結果が見られるかどうかを検証する必要がある。

〈台湾 慈濟大学〉

付録(対象となった全ての動詞)

状態変化動詞	位置変化動詞
似合う、黙りこむ、満ちる、なる、増える、似る、知る、盛る、限られる、慣れる、気に入る、交じる、溶ける、含む	持つ、止まる、占める、着る、巻き込む、並ぶ、はまる、付く、浮かぶ、出る、普及する、進む、入る、置く、張る

注

[注1] …… 動詞の定義については奥田（1977）の分類基準に従う。動作動詞はテイル・テイタという形をとることにより、「動作の持続」を表すのに対し、変化動詞は「変化の結果の状態」を表す。

[注2] …… 学習者が使用した誤用の「て」形は、「誤用のタ」と「誤用のル」のどちらかと判断しにくいことで、「その他の誤用」に入れた。

参考文献

- 庵功雄（2010）「アスペクトをめぐる」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, pp.41-48. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 魚住友子（1998）「追跡調査に見られる「～ている」の習得状況」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成7-9年度科学研究費報告書 pp.100-111.
- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐる一金田一的阶段」『国語国文』8 宮城教育大学国語国文学会
- 影山太郎（1996）『動詞意味論一言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎（2001）『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店
- 川野靖子（2003）「位置変化動詞と結果の副詞句」『筑波日本語研究』8, pp.39-48. 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室
- 簡卉雯・中村渉（2010）「台湾人日本語学習者の「ている」の習得に関する縦断研究—「結果の状態」の用法を中心に」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』5, pp.83-92. 東北大学高等教育開発推進センター
- 許夏珮（2005）『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 工藤真由美（2002）「文法化とアスペクト・テンス」上田博人（編）『シリーズ言語科学5 日本語学と言語教育』pp.71-92. 東京大学出版会
- 黒野敦子（1995）「初級日本語学習者における「～テイル」の習得について」『日本語教育』87, pp.153-164. 日本語教育学会
- 小山悟（2004）「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に」小山悟・大友可能子・野原美和子（編）『言語と教育』pp.415-436. くろしお出版
- 塩川絵里子（2007）「日本語学習者によるアスペクト形式「テイル」の習得—文末と連体修飾節との関係を中心に」『日本語教育』134, 100-109. 日本語教育学会
- 白井恭弘（2004）「非完結相「ている」の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉（編）『対照言語学の新展開』pp.71-99. ひつじ書房
- 菅谷奈津恵（2003）「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」『日本語教育』119, pp.65-74. 日本語教育学会
- 菅谷奈津恵（2004）「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討」『日本語教育』123, pp.56-65. 日本語教育学会

- 菅谷奈津恵（2005）「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊特集号, pp.40-66. お茶の水女子大学日本語文化学会
- 陳昭心（2009）「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』19, pp.1-15. 国際交流基金
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 鷺尾龍一・三原健一（1997）『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社
- Andersen, R. W., & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, pp.133-156.
- Ishida, M. (2004) Effects of recasts on the acquisition of the aspectual form *-te i-(ru)* by learners of Japanese as a foreign language. *Language Learning*, 54, pp.311-394.
- Shirai, Y. (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5, pp.42-61.

